

愛の殉教者 トリスタンとイゾルト-IV-

伊 東 泰 治*

Marterære Tristan und Isold Gottfrieds von Straßburg-IV-

Yasuharu ITO*

§5 アイルランドからコーンウォールへ1

1) 竜退治の意味するもの

竜は聖書（ヨハネの黙示録，12,9;20,2）によれば，神に敵対するもの，悪魔，サタンとされているが，中世キリスト教時代においてさえ竜のイメージは多様で，種々の意味を包含していた。一般的には攻撃的で危険な動物，爬虫類か巨大な蛇に関連した動物を連想させるもののようである。中世盛期の文学作品では竜のもつよいイメージは打ち消されて，敵対者，異民族，貢を要求する者（いわゆるモレク神への生贄“Moloch-sacrifices”を強要する者，レビ記，18,21;20,2），あるいは超自然力を持つものを象徴する。

竜退治について言えば，「ニーベルンゲンの歌」では，ジークフリートが「竜を退治した」（100,2）と言うだけで，古典的パターンである「竜退治－乙女の救出」にはふれない。ジークフリートが，竜の血を浴びて不死身になったこと，そしてたまたま背に落ちかかったリンデの葉のため，そこだけが「アキレスの腱」となり，ハゲネに槍で突かれた，それがブルグント族の滅亡につながってゆく悲劇の発端に利用されている。

いわゆるアーサー王物語にも竜退治は出てこない。「パルチヴァール」では，(a) 母ヘルツェロイデが，「竜を産んだ」夢を見たのは，支配者の誕生の予示であろう¹⁾。(b) オリルスに描かれた竜は，彼がパルチヴァールの一族に敵対する関係にあることを示すものである。

ゴトフリートが，新しい問題意識を持って取り組んだ作品の中に，メルヘン的で，古風な竜退治を持ち出した意図は何だったのだろうか。

トリスタンの竜退治は，(a) アイルランド住民の解放と，(b) 「アイルランドの世襲権を持つ王女イゾルトを妻とする資格」をもたらしたが，同時に，(c) 「ニーベルンゲンの歌」と同じように予期しない事態を招来した。イゾルトが，竜の毒に意識を失ったトリスタンを介抱している時，偶然見付けた彼の剣の刃こぼれから，彼が伯父殺しの本人であることが発覚して，イゾルトの怒りを買うことになった。

*国際文化学科 (Department of Comparative Cultures)

竜退治のエピソードは、物語展開の動機に用いられた。

2) 両国の和平成立

アイルランドの宮廷会議で、竜退治にまつわる事件は、一応の決着がついた。グルムーン王の事情説明があって、一同は両国の永年の不和が解消されたことを喜び、トリスタンとの間に和議が成立した。

トリスタンとマルケ王の臣下たちは、イゾルトにはマルケ王の王妃としてコーンウォールの国が与えられ、全イングランドの王妃たることを誓った。これに対してグルムーン王は、アイルランドの相続権を持つ娘のイゾルトを、アイルランドの解放者にして、花婿の代理人たるトリスタンの手に引き渡した。

イゾルトの恨みは残るものの、コーンウォールとアイルランドの和解が成り、トリスタンのイゾルトへの道のりは急速にせばまった。2人の完全な愛への障碍は、イゾルトの伯父殺しに対する恨みと、他方トリスタンに寄せる伯父マルケの寵愛であろう。この二つのいわば「近親相姦の関係」からの離脱が、二人の完全な愛の成就をもたらすのである。

3) 媚薬と愛

(a) ゴットフリートの媚薬。洋の東西を問わず、物語を簡明に特徴づける象徴的な言葉がある。西欧中世文学では、「パルチヴァール」の「聖杯」や「問いの怠り」、そしてトリスタン物語の「媚薬」「愛の洞窟」がこの種の言葉である。それぞれ言葉の一般的な意味は明らかであるが、その寓意、作者の意図となると測りかねる場合が多く、多様な解釈を可能にする。しかも読み手がいかように解釈しようと、この言葉がなければ物語の魅力がうすれ、その存在感すらなくなる程の重さをもつものである。トリスタン物語の媚薬も、物語構成上の役割をめぐってこれまで幾度も論じられてきた。ここで少し整理しておこう。

トリスタンは大役を果し、帰国の準備をすすめる。貢として送られていた人質たちと一緒に連れ帰るため、更に船一隻を手配した。これに対してアイルランド側は、マルケ王の王妃となる王女イゾルトの興入れの品々、供回りについては何一つ述べられてはいない。語られるのは、母のイゾルトが用意した媚薬——初夜の床でマルケ王と共に飲むべき飲み物と、その媚薬の厳重な保管をゆだねた侍女のブランゲーネだけである。

これは「愛の飲み物」(*tranc von minnen* 11435)で、作者ゴットフリートの説明によると、イゾルトとマルケ王の「愛の合意がなった時」一緒に飲むもの。その効力は、(i) 誰であろうとそれを飲めば、「自分の意志に反して互いに愛せざるを得なくなる」、(ii) 2人の愛は相互的で、「その人だけを愛するようになる」、(iii) この愛は従って「二人に対して、一つの死と一つの生を、一つの悲しみと一つの喜びを一緒に与える」ものである (11439-11444)。

従ってゴットフリートの「愛の飲み物」は、若い新妻と老いた夫の性欲を昂進させる催淫剤ではない。結婚後の二人の確かな愛を保証し、喜びと苦しみを分け合い、愛のために生死を共にする効力を持つ飲物である。ゴットフリートがプロローグ (201-204) で読者に熱っぽく語りかけた「純粋な愛」を呼びおこす飲み物と言っていいだろう。トマもこの愛を「純粋で真の愛 (*amur*

fine et veraie, D1219) と言っている (注6参照)。

(b) 世にいう「トリスタンの愛」の系譜を辿ると、物語の祖型の一つとされる古いアイルランドの民話の中に、惚れた相手に魔術をかけて我が意に従わせる話がある。老いたる王フィンの甥ディアメイドは、「それを見るとどんな女をも恋心を抱かせる lovespot (チャーミングな愛の斑点、あざかほくろ?)」を持っていた。フィンの妻グライーネは、それを見てディアメイドに恋心を抱き、駆け落ちを持ちかける。しかし男は、主君への忠誠心が強く彼女の誘いに應じない。そこでグライーネはゲイス (*geis*) という魔術的呪いをかけて呪縛し、男を自分の意志通りに動かし、一緒に森に逃亡する。女は男の lovespot の魔力に捕われ、男は女の *geis* の呪いかけられる。こうして2人は宿命的に結びつけられてしまう。これが後に媚薬に肩代りされたのであろう。

ゲイスは、愛が宿命的で、個人の理性を奪い、社会の秩序を乱し、危険にする力をもっているという考えを象徴している。このあらがいが難き愛は、中世では女神ヴィーナスによって表わされるようになった。

(c) アイルハルトとベルールの媚薬。現存する初期のトリスタン物語では、二人は媚薬によって結ばれる。不倫の愛が全く媚薬のせいであって、当事者の自由意志に基づくものでなければ、媚薬は免罪の立証に役立つであろう。だがそれと引きかえに、姦通愛―純粋な愛の与える衝動的効果や緊迫感は希薄にならざるをえない。

流布本系のベルール版とアイルハルト版では、媚薬の効能期間が限定されている：

「飲み物は次のように作られていた。女と男が一緒にそれを飲んだ時、4年の間離れられなかった…4年間2人の愛が非常に強かったので、2人は1日たりとも離れていることはできなかった。一週間も話し合うことができなかったら、2人は…衰弱し、死んでしまったのです…この飲物は抗し難い働きを持っていたのです」(アイルハルト, 2279ff)。

「2人が媚薬を飲んで4年が終った。今、別れることができるように思われた。森の中で耐えねばならなかった不自由さが、今や耐え難いものになった。2人はこの苦労は一日たりともがまんできなかった」(同, 4733ff)。

フランスのベルールもほぼ同じようである：

「恋の飲物、薬草を入れたワインを作ったイズーの母は、3年の愛と定めたのである」(2138ff)。
「彼(トリスタン)が私(イズー)を愛し、私が彼を愛するのは、私が飲み彼も飲んだ薬草入りのワインのためです。これは罪²⁾ (*péchiez*) でした」(1413ff)。

ベルールの3年期限説もアイルハルトの4年期限説も、原則的な対立があるわけではない。媚薬の作用の期間を限定した主たる意図は、2人の恋人を森の生活から脱出させるためである。2人の別離と死という物語本来の結末につなげるためには、どうしても2人を森の中から引き出す必要があったのだ。舞台を回転させる必要があった。

ただ3年または4年で媚薬の効力が切れ、2人の愛が消滅するわけではない。

イズーは隠者にマルケ王との仲直りの執りなしを頼む：「トリスタンのことを後悔するとか、不名誉なやり方 (注：私の体と彼の体との結びつき, 2329) ではなく、愛しい友として、正しい

愛情で愛さないとは、私、申しません」(2325ff, 新倉訳)。

イズーの愛が消えてないからこそ、虫のいい頼みができたのである。

トリスタンは白い手のイザルデと結婚したが、その体には触れなかった。王妃イザルデが忘れられなかったからである(アイルハルト)。トマは白い手のイズーの心を付度する。はねた水が、夫トリスタンの触れない彼女の股をぬらした時、水の冷たさに身震いしたと。

(d) 魔女と、オウィディウス。媚薬は古くは Hexe (魔女) が調合したとされている。女王が Hexe の仕事に関わったとすると、魔術の嫌疑がかかる。魔術師は異端として火刑、車刑あるいは水死の刑に処せられることがある。

オウィディウスも媚薬を用いることを非難している。「青白い色にさせる媚薬 (*philfrum*) は、愛する女に利きはしないだろう。媚薬は精神を害し、狂気を起させる」(*Ars amoris* II, 110f)。

(e) 媚薬の拒否。トリスタンの愛が、自由意志ではなく、媚薬によって成立したことに対しては、すでに12世紀に反発をかつている。

クレチアン・ド・トロワは、シャンソンで異議申し立てを行った：

「トリスタン (の心) を毒したあの飲み物を私は飲みはしなかった。しかし私の優しいハートと私の正しい意志が、愛の飲物以上に私を愛するようにさせた」。

「エネイーデ」の作者フェルデケのハインリヒも同じ思いである (MF58, 35)：

「トリストラントは自分の意志に反して、女王に誠実に愛を感じざるを得なくなった。愛の飲物 (*poisûn* 毒) が、愛の力より以上に、彼をそう仕向けたのだ。かのよき女は私に感謝すべきだ、私がこのような飲物を飲まずとも、きっと彼以上に、彼女を愛していることに対して。誠実な、美しい女よ、私をお前のものにしてくれ、そしてお前は私のものであってくれ」³⁾

クーシ城主の「第三歌」：

「媚薬を飲んだトリスタンでさえ、私ほどには悔いなく誠実に愛さなかった」

4) 二人の愛はいつ芽生えたか。

媚薬について考察すべきことは多いが、ここでは、二人は媚薬を飲んだが故に愛するようになったのか、それとも飲む以前にすでに愛が芽生えていたかの問題についてふれておこう。

作者は当然のことながら、2人の愛がいつ始まったかについては用心深く避けている。しかしトリスタンの両親リヴァリーンとブランシェフルールの愛は、媚薬や魔術的な力によって生じたものではなかった。両親の愛を予型と見るならば、イゾルトへのトリスタンの長い道のりの間に、徐々に愛は発生したと考えるべきだろう。少なくともモーロルトとの戦い以来2人は間違いなく相互に接近し合っている。2人が媚薬を飲む (11678ff) 前の状況をさかのぼって検討してみよう。

(a) トリスタンはモーロルトと闘った時、毒を塗った剣で太ももに傷を負った。この傷はモーロルトの妹、王妃イゾルトによって治癒したが、その返礼として王女イゾルトの教育を引き受けることになる。「この王女はまこと『愛の封印 *insigel der minne*, 7812』であって、後にこれで彼 (トリスタン) の胸は封印され、彼女以外のこの世のすべての女が締め出された」(7812ff) と、作者は読者に語りかけている。⁴⁾

傷は20日で治癒したが、なお半年間滞在する(8027)。帰国を申し出ても、王妃は一年経たないちは帰しませんと言って引きとめる(8184)。トリスタンは、妻が待っていると嘘をついてやっと帰国の許可を得る。王妃は「私はお前が好きで、好意を持っている」(8209)と言って別れを惜しみ饞別に純金2マルクを与える。

(b) 帰国後トリスタンは、マルケ王宮廷の人々の前で、イゾルトの美しさを長々と、得々として語る。「世の中の人々が口にするとどんな美人も、彼女に比べれば無に等しい」(8253ff)、ギリシアの絶世の美人ヘレナよりも、と言い添える。

彼女の美しさに感嘆したトリスタンは、「第2の生が与えられ、生れ変わった人間(*niuborner man*)であった」(8312f)」と。イゾルトに会って、今までとは全く違った人間になったのである。全く同じように、ブランシェフルールに対する愛の目覚めは、父リヴァリーンを変えてしまった：今や彼は第二の人生を始めた。新しい生が彼に与えられた」(937f)。

(c) マルケ王の顧問官たちはトリスタンを心よく思っていない。王には、敵対関係にあるアイルランドの王女イゾルトとの結婚をすすめる、その使者としてトリスタンを推挙する。王は彼らの底意を察して反対したが、トリスタンは「他の誰よりも勇を鼓し、進んで引き受けましょう」(8549f)とこれに応ずる。死の危険を伴うアイルランド行きを覚悟してのこと。意識下でイゾルトへの吸引力を強く感じたのであろう。

(d) トリスタンは竜と闘ってこれを倒したが、竜の毒気にやられて意識を失った。王妃イゾルト、王女、ブランゲーネと王妃の小姓の4人が、密かにトリスタンを探しに出かけた時、「運命の定め通り、自分の命であり死であり、喜びであり悩みである人(トリスタン)を誰よりも先に見付けた」(9370ff)のも王女イゾルト、またこの騎士が「吟遊歌人のタントリスだわ」(9472)と気付いたのも王女イゾルトであった。かつての自分の教師を忘れていなかった、「私には国に妻がいます」などと嘘をついて帰って行った彼を。だからこそ内膳頭が、竜を退治したと主張し、約束の報償として王女イゾルトとの結婚を迫った時は、イゾルトは死をもって拒否したのである(9283ff)。

(e) 竜の毒に倒れたトリスタンを、母が治癒し、娘が看護にあたる、「やさしい心遣いで」(9987)。回復して顔色もよくなったトリスタンを、「イゾルトは幾度も秘かにその手と目を、腕と脚を見詰めた…凡そ乙女が関心をもって見詰める男性のどの部分もすべて気に入る、心の中でほめちぎった」(9995ff)。イゾルトには感謝もあり、安堵もあり、そして好感以上のものがあつたと思われる。

中世では、愛は目から心の中に入っていくと言う。イゾルトの美しさは「秘かに目の窓を通して多くの高貴な心の中へ忍び込み…たちまち思いを捕え、愛と愛の苦しみを捕えて離さなかった」(8124ff)。このイゾルトも回復したトリスタンの体を「上から足の先まで」見詰めながら、同じ思いに捕われたであろう。

こうしてイゾルトの心の変化を追ってゆくと、彼女のトリスタンに対する愛は媚薬を飲む前にすでに芽生えていたと考えるのが自然であろう。

これに対して異論がないわけではない⁵⁾、トリスタンの愛情についての作者の記述が抑え気味であることも否めない。マルケ王に対する封建制下の家臣としての忠節心と、甥としての肉親の感情が、節度を要求したのであろう。またこうした面を無視しない方が自然であり、媚薬をモチーフとする物語の劇的効果をたかめるのにも有効であろう。

トリスタンとイゾルトが、封建的義理、和解のための取引、屈辱的犠牲、一族の強制などと全く無縁の「純粋な愛」に到達するためには、トリスタンの抱く忠誠心とイゾルトの伯父殺しの恨みという二つの障碍を乗り越えねばならない。それは、ゴトフリードのよくいう偶然の契機(*von aventure*)である媚薬⁶⁾によって実現する)。

§6 アイルランドからコンウォールへ 2

1) 舟出、港、媚薬

船はコーンウォールに向け出帆する。「イゾルトとイゾルト、太陽と曙と、美しいブランゲネの満月は互いに別れねばならなかった」(11507ff)。トリスタン側は、両国の和解がなり、マルケ王の王妃たるべきイゾルトを連れ帰ることができ、浮々し喜び勇んでいる。「人々は高らかに一度、更にもう一度歌った、『神の名において我ら行かん』」(11532ff)。ある古い巡礼歌のだしの言葉である。

トリスタンの計らいで、イゾルトと侍女たちに女性専用の船室が与えられる。彼女は父母に別れた淋しさ、将来の不安から悲しみ泣き続ける。トリスタンは貴婦人に対する臣下のように接し、やさしく慰めるが、彼女は伯父の死を思い出して、かたくなな態度をとり続ける。「あなたを憎んでいます」—なんで私を苦しめにアイルランドへ来られたのか。私を親から騙し取って、知らない土地へ連れて行こうとされるのか。私はどうして結婚させられるのか、一体どうなるのか私は知らない。あの内膳頭を夫にしていた方がましだったと毒づく。両国の和解と王女イゾルトの輿入れについては決着がついたはずだ。イゾルトだけは感情的に承服できなかったのか。女心というものか。

航海は順調だったが、婦人たちは船旅には慣れていなかったのも、船長役のトリスタンは船を陸地につけて休息することにした。ほとんどの人が上陸した。トリスタンは船室に残っていたイゾルトを訪ねて挨拶した⁷⁾。女のそばに腰をおろす。2人はあれこれ「自分たちのこと」を話し合った時、トリスタンは飲み物を求めた。一人の侍女が言った、「ここにワインのびんがあります」。作者はこの言葉を直接その場で耳にしたように驚き、説明する。「違う、それはワインではなかった、ワインのように見えたが、それは永遠の苦しみ、無限の心痛で、そのために2人は死ぬことになるのだ」(11672ff)。

「侍女はグラスのびんを船長のトリスタンに渡す。トリスタンはまずイゾルトに勧める。イゾルトはしばらくして、いやいやながら飲み、トリスタンに返す。彼は飲んだ。2人ともワインだと思って」(11681ff)。

そこにブランゲネが入ってくる。グラスびんを見てすべてを察した。「呪わしいびんを取り

あげると、荒れ狂う海に投じた」——実際はこの時は「順風」で、それに船は港に停泊中だった。「荒れ狂う海」とは、動転した侍女ブランゲーネの心理を写したのであろう。

なおアイルハルト版では、媚薬は男が先に飲んでいる (2350-52)。楽園の果実は、「女は実を取って食べ、一緒にいた男に渡したので、彼も食べた」(創世記3,6)、あるいは2人の飲んだワインのようなものは愛の女神の Eucharistie (聖体) だったのか。何れにしろ「2人の目は開いた」(創世記3,7)⁸⁾。

2) 媚薬のもたらしたもの

(a) 媚薬を飲んだ後の心の変化を、ゴトフリートは800行を費やして丹念に述べ (11707-12506)、その中に「愛についての余談」(Minne-Exkurs) の175行 (12183-357) を挿入している。

この800行は、いわば芝居の幕間劇であり、次の新しい舞台の前奏曲である。2人が媚薬を飲んで「以前に二つで別々であったのが、今一つで一緒になっ」て (11716f) —同時代の聖職者の言葉を借用するなら *unio mystica* (神秘的合一) を遂げて、次に演じられる愛の冒険に橋渡しをしている。対応する両親の場合は短い：「リヴァリーンとブランシェフルール、(心の国の) 王と優しい女王とは、彼らの心の王国を等しく分けあった」(813ff)。

ここでも調子を合わせるようにして始まる：乙女と男、イゾルトとトリスタン、この2人がこの飲物を飲んだかと思うと、たちまちこの世の人を不安にさせる者、すべての人の心を付け狙う者ミンネ (愛の女神, *Minne, aller herzem lûgærîn*, 11711) が、2人の心の中に忍び込んだ。気付かぬうちにミンネはもうそこに勝利の旗を打ち立て、彼ら2人を支配下においていた。以前は2つで別々であったが、今は一つで一緒であった。2人はもはや互いに敵意を抱いてはいなかった。イゾルトの憎悪は消え去った。ミンネは2人の心から敵意を洗い落とし、愛情で結び合わせたので、2人は鏡を見るようにお互いがはっきり見えた、2人は一つのハートを持ち、彼女の苦しみは彼の痛み、彼の痛みは彼女の苦しみであった。彼ら2人は共に喜び悲しんだ。

ミンネの女神によって、イゾルトの伯父殺しの恨みと敵意は消え、トリスタンは伯父マルケ王の課した使命を忘れ去り、義務を放棄する。2人はミンネの軍門に降った。それは封建社会を律する法からの逸脱であり、ミンネの女神の世界の掟に従い、新しい別の価値観を共有することを意味する。

しかし2人は小川を飛び越えるように、新しい世界に入るわけにはいかない。愛を告白するまでには相手に対する「疑念」と、心を打ち明ける「恥かしさ」(*zwîvel unde scham* 11733) が足かせになる。中世文学にはまれな克明さで、比喩をまじえ心理を描写する。トリスタンは愛を意識した時、悩んだのは「名誉 (社会的信用) とマルケ王に対する誠実義務」(*triuwe unde êre*, 11744) と、「愛」(*minne*) との相克であった。「愛」にひかれ、「名誉と誠実」に引き戻された。トリスタンは愛の「わな」(*stricke*) にかかった。イゾルトは愛の「とりもち (*lîm*) につかまった⁹⁾。トリスタンの父リヴァリーンもすでに同じように、鳥もちをぬった枝にとまり、逃れることが出来なかった。このリヴァリーンを「希望」と「疑い」(*trôst unde zwîvel*) が互いに引っ張りあった (883f)。これが「愛の習い、これが恋の掟である。今も昔も愛の存する限り」変ることはなかつ

た (11858ff)。

(b) 船が港に停泊中——その時 2 人は娼薬を飲んだのだが——それを境にして当然のことながら、2 人の精神状況が一変する。「船は岸を離れて、楽しげに」コーンウォールへと向かう。しかし「愛の女神は 2 人 (の心) をその軌道から外してしまった」からである。

愛の女神は次に画家 (*verwærinne* 11908) の役目をする。2 人が見詰め合えば、思いは色に出る。「愛の女神が 2 人 (の顔) を彩るままに青くなり、赤くなった」。2 人は顔に現われた色で、互の心を確認する。

すぐ話し合う機会を求める。この場合は愛は獵師 (*der minnen wildenære* 11930)¹⁰⁾ となって、互いに相手に網をはり、わなを仕掛ける。イゾルトは回り道をしながら確実に近づいて行く。2 人が共にした体験を逐一話し合う、湯殿の場面も。思い出は 2 人の心を近付け、2 人だけの世界を作る。

女のかけたわなに男がはまる。「空と海が私を苦しめます」と謎めいた言葉を投げかけて、イゾルトは「肘で彼にもたれかかった。それは大胆な行動の始まりだった。彼女の鏡のように澄んだ目には、知らない間に涙があふれた。胸はふくらみ、唇もふくらみ、頭はうなだれた。男は女を抱いたが、つかず離れず、見知らぬ人を抱くように」(11970ff)。そして聞き直す、「何があなたを苦しめるのですか」。愛の女神の飼い馴した鷹 (*der minnen vederspil* 11985) であるイゾルトは、^{ラメール} またも謎めいた言葉 ^{ラメール} *lameir* をもって襲いかかる：「^{ラメール} *lameir*, それが私の苦しみです」。 *lameir* は一種の掛けことばで、*l'ameir* は「愛、恋」の意であり、*la meir* は「海」の意であり、*l'ameir* は「にがい、つらい」の意である。「海 (と航海) のつらさが、海と風があなたを苦しめるのでしょ

う」と男が聞けば、女は苛立ってきっぱり否定する：「風も海もいやではありません。^{ラメール} *lameir* だけが私を苦しめるのです」。¹¹⁾

2 人の愛の告白は口づけに続き、トリスタンはやっと自分の置かれた状況をはっきり意識する、「道を大きく踏み外し、2 度と後に戻れない」こと、そして「目に見える現実がすべて無価値に見えてきた」こと (12020ff)。2 人は愛の告白と同時に、ミンネへの入信を確認する。

(c) 次の段階では、医師である愛の女神 (*Minne diu arzatinne* 12164) が登場する¹²⁾。夜ひとり恋に病むイゾルトの部屋に、医師の愛の女神が自分の患者であるトリスタンを連れて行く。女神の医師は「2 人の患者の手を取って、彼を彼女に、彼女を彼に薬として与えた」。愛の治療薬は重傷を負った父リヴァリーンも同じこと。人を遠ざけて待っていると、家庭教師は恋人ブランシェフルールを医者として彼の伏せる病床に連れて行った。

最後に、愛の女神はわなをかける人 (*Minne diu strickærinne* 12176) として現れ、二つのハートを甘美な紐で、大へん巧みに、不思議な力で一つに結びつけた。そのため 2 人は生涯離れることはなかった。

3) 余論 (Minne-Exkurs)¹³⁾

「恋の長話しは教養ある宮廷人にはわずらわしい。よき恋の短き話しこそ、よき心にはよきことなり」で始まる。詩形上も *minnen-sinnen-minnen-sinnen* の交差型の脚韻をもつ詩節形である。

また最初の行のEと、5行後のSは、アクロスティヒョンをなしている。ゴトフリートはここで愛についての自説を展開する。愛に誠実が失われ、不誠実、偽り、嘘偽りが愛の中に持ち込まれていると嘆く。「ヒヨス (なす科の毒草)¹⁴⁾の種子をまいても、ゆりやバラは生えてこない」。「我々は *valscheit* (偽り・不正実) をまいて、恥と心痛を刈りとっている」。ヒヨスとはこの *valscheit*, 即ち誠実のない愛、売買し、取り引きされる愛、「不純な愛」を意味している。これに対して「常に変らない愛 (即ち「純な愛」) の心があれば…どんなに苦しかろうと、いつも幸福なのだ。残念ながらそうした愛の心は今やない」。だからこそかつて数百年前に誠実な心を持って生きた人の美しい恋の物語が、心の慰めとなり、価値があるのだ。プロローグの言葉が繰り返される。

Ⅱの2 トリスタン物語の後半部

§1 ブランゲーネ

1) トリスタンの騎士叙任以後の行動は、主として騎士の剣と勇気によって律せられた。父の敵モルガーンも、主君マルケの敵モーロルトも、アイルランドの敵の竜も、トリスタンは自らの剣と槍で倒して、祖国を、コーンウォールを、そしてアイルランドを救った。

これに対して媚薬以後の彼の思想と行動を律するものは、イゾルトに対する「清い愛、純粹な愛」(プロローグ、96行)である。

アベラールは「マルスの宮廷を去って、ミネルヴァのもとに赴いた」(第一書簡)。この言葉をもじって言えば、トリスタンは「マルスの宮廷を去ってウェヌスのもとに赴いた」。アベラールは「弁証法の騎士」になり、トリスタンは「愛の騎士」となった。

媚薬以後のトリスタンは、マルケの王妃イゾルトに関して次々に起こる試練に巧みに対処してこれに打ち克ち、「清い愛」を実証しうかが問われる。マルケはイゾルトの夫であり、トリスタンの伯父であり、コーンウォールを支配する王である。封建制を支える忠節と、肉親の情愛は、「清い愛」を前にしてどれ程の重さを持つのであろうか。「我々が愛の喜びを求めようとすれば、我々はまた苦悩にも耐えねばならない」(12504ff)¹⁵⁾。

2) マルケ王宮廷で2人を迎えた難関は、花嫁となるべきイゾルトの処女喪失の問題である。結婚の初夜の床でマルケ王に、これをどうして隠すか2人は悩んだ。だが「恋は誠実な人間に欺くことを教える」(12447ff)。イゾルトは自分の身代りを思い付き、侍女ブランゲーネに初夜の床をマルケ王と共にするよう頼んだ。

それが二人にとって「賢明で、最善の策」(12437f)であったのだろうか。ブランゲーネはやむなく、媚薬の保管の責任をとり、重い心をもって同意した。¹⁶⁾

ブランゲーネはその時初めて「ビンの中の飲み物は、あなた方の死なのです」¹⁷⁾ (12487f) とその正体を打ち明けた。トリスタンは驚きもしないし、たじろぎもしなかった。「それが死であろうと、生であろうと神のみ心のままに。私は甘美な毒をもらったのだ。本当の死がどんなものか、私は知らないが、この死は私には心地よいもの。喜びを与えてくれるあのイゾルトが、私の

死であるなら、私は喜んで永遠の死を求めます」(12494ff)。新しい世界に入るにあたってのトリスタンの誓いの言葉であろう。

トリスタンはイゾルトとの「清い愛」と引き換えに「彼岸の永遠の死」を覚悟した。古き世のカルタゴの女王ディードーは、愛するアエネアスが去って行った時、悲しんで身の不遇を嘆いた：「おお、むごい愛の女神よ、私の思いは言葉では尽くせぬ…恐ろしい苦しみのために歩くも立つも、寝るも坐るもかなわぬ。私は暑さに死に、寒さに苦しむ。どうしてか分らぬ。私は怖ろしい毒をもらった。もう生きようとは思いません」(フェルデケ。En. 2374-94)。死を前にしたフェルデケのディードーの、「恐ろしい毒にもられた」という嘆きは、「甘い蜜の下に悪い毒がひそんでいた」という後悔の念であり、それ故彼女は自ら死を選んだ。ゴトフリースのトリスタンは、これに答えて「私は甘美な毒をもらった」と言ってその死を甘受する。愛における永遠の死はまた永遠の生であるという認識がある。

トリスタンには他に可能性はあった。父が母を誘拐したように、イゾルトを自分の国バルメニーエに連れ去り、自分の妻にすることができたであろう。彼はその道を選ばなかった。そのまま船をコンウォールに進め、マルケ王とイゾルトの結婚を認め、そうした人間関係の中でイゾルトの愛を求めた。愛は結婚の外にしかありえない。後でイゾルトと別れて白い手のイゾルトと「結婚」することになった。しかし2人の間に「愛」は成立しなかった。

3) マルケ王とその領国民はこぞって「全世界の奇蹟、金髪のイゾルト」を喜び迎えた。夫婦間の財産に対して申し合わせがなされた。(a) イゾルトに子供が生まれなかった時は、トリスタンが王位継承者になる。(b) イゾルトに、コンウォールとイングランドを遺産として渡すことが確認された(12571ff)。

マルケとイゾルトの結婚式も、トリスタンの刀札の式と同じようにその描写はない。結婚式の夜のシーンは、きわどきとこっけいさの点で中世後期のシュヴァンクを思わせる。「ニーベルンゲンの歌」では初夜、新妻ブリュンヒルトはか弱いグンター王の愛を力で拒否する。それどころか王を後ろ手にしばって、壁に吊してしまう(630詩節以下)。「パルチヴァール」の主人公と新妻コンドヴィラムールスは、両者共にはじらって体に触れようとしなかった(201詩節以下)。それぞれ異常で、悲喜劇的である。

ここでは、2人の秘密がマルケ王に気付かれないようにしなくてはならぬ。マルケ王が先に床に入る——王妃の衣服に取り替えたブランゲーネをトリスタンが伴ってくる——イゾルトが明りを消す——マルケがブランゲーネを抱きしめる。3人の共同謀議通りに事が運ぶ。愛の当事者と傍観者の気持を、作者が代弁する。

代理妻ブランゲーネは、「拷問の苦しみ」に耐える。イゾルトは不安で落ちつかない。ブランゲーネがマルケ王の愛に喜びをおぼえ、明け方まで愛の戯れを続けはしないかと。ブランゲーネが務めを果すと、機をうかがい彼女と入れ替る。風習に従って王と王妃はトリスタンの持って来たワインを飲む。飲み終るとマルケとイゾルトとが床に入る。イゾルトは「大へん苦しみ、秘かに胸の痛みを感じた」(12660f)。マルケは、2人の女が交代したのに気付かない。マルケ王のおかれ

た位置が明らかになる。

トリスタンの役は、イゾルトを装ったブランゲーネをマルケのもとに連れてくること、和合なった2人にワインを持ってくること——これは本来侍女の勤めだが、陰謀が洩れないための策である。こうした陰謀は以後の王に対する2人の行動を暗示している。

4) 「ひとは恥と嘲笑を神以上に恐れるものだ」(12711f)。瀆神的なこの言葉はイゾルトの心を言いあてている。イゾルトは「ブランゲーネがマルケに愛情を抱き、自分の恥ずべき行動を王に打ち明けはしないかと心配し、ひどく恐れた」(12702ff)。そこで2人の若者を使って、ブランゲーネを亡きものにしようとする。彼女の首をはね、証拠の品としてその舌を持ち帰るように、報酬として封土を与え騎士に取り立てることを約束した。2人の若者は森の奥深く連れて行ったが、おびえて泣く女に、「殺害に価するものは何一つ見出し得なかった」ので、あわれと思い、立ち木に縛り付けただけで、代りに猟犬の舌を持ち帰った。

ブランゲーネが彼ら2人に、自分たちの秘密を洩らさなかったことを確かめると、とたんにイゾルトの態度が急変する。「いまわしい殺人者ども、お前たちは縛り首だ」。あまりのことに2人は反論するが、侍女を殺せといった覚えはない。森の薬草取りを頼んだだけで、「あの人を私に返しておくれ、でないと…縛り首か火あぶりですぞ」とせまる。

媚薬を飲む前のイゾルトの理不尽な言い草(11577ff)を思い出す¹⁸⁾。このシーンでは一段とエスカレートする。2人の若者の持ち帰った殺害の証拠物件である犬の舌と、ブランゲーネの舌との見分けがつかぬとは。剣の刃こぼれとその破片の整合を見抜いたあの冷静なイゾルトが、この時は分別を失い、錯乱したのだろうか。

イゾルトの「口は大へん変り易い」(12909)。ブランゲーネが生きていると分れば、激しく泣き出し、2人の若者に彼女を連れ帰ってくれと懇願する。口止め料20マルクを渡すことは忘れない。ともあれこの事件を通して、ブランゲーネの誠実が疑うべきものでないことが確認されたのは確かである。

このブランゲーネの章は662行で、帰国から結婚までは49行、初夜の床のシーンが99行に対して、ブランゲーネ殺害未遂のシーンは241行である。感傷を許さない残酷なシーンである。経過が精しく、非情に描かれている。この241行をはさんだ前後の箇所では、特別な具体的出来事はない。恋人のひそかなまなざし、2人だけしか理解できない言葉のやりとりが交される。愛の序曲である。

(i) 12675-693の19行、「イゾルトはマルケ王に愛され、国中の人から称賛され、尊敬された。その間2人の恋人は「朝から晩まで楽しみごと、喜びごとを持った…誰にも気付かれることなく」。しかし具体的描写はない。

(ii) 12935-13096の162行。ここでは愛の交流が述べられる。2人は周囲の人々に気取られることなく、まなざしや身振り、意味深長な言葉で相互に理解し合う。「2人の交わす言葉の中に、愛の言葉が、飾り紐の中の金糸のように織り込まれていた」。宮廷の人々はこれを「身内の間の愛」と思っていた。この態度は外に対しては偽りの行為、欺きであるが、二人の間では「この愛は純

粹で非難の余地ないもの」なのだ。これを聖書マタイ伝5,37¹⁹⁾を敷衍して説明する：「2人の心と2人の意図はまったく一つと一つ、*ja*と*ja*, *nein*と*mein*であった。*ja*と*nein*, *nein*と*ja*では決してなかった」。愛する2人は喜びにおいて一つであり、悲しみにおいても一つであった。

「2人の間に諍いがなくてはなかった。しかし諍いといっても『憎しみを持たぬ諍い』(*zorn âne haz* 13033)である」。恋人同志は互いに相手が「誰か他の人が好きになり、自分よりも心を引かれているのではないかという小さな嫉妬めいた邪推から大きな諍いとなり、小さな悩みから大きな和解が生れる」。しかし「まさにこのようにして愛は豊かになり、若返り、新しくなり、誠実が鼓舞されるのだ」こうした嫉妬についての考えは、古典作家から学んだのであろう。

シリアのプープリリウスは「愛する人たちの諍いは、愛をより新鮮にする」(「格言集」と言い、ローマの喜劇詩人テレンティウスは「愛する人たちの口げんかは愛をより新鮮にする」(「アンドロス島の女」と言い、オウィディウスは「諍いが締め出されると、愛は永続きしない」(「愛について」, I,8,96)と言っている。アンドレアス・カペラヌスの恋の戒律21条：「真の嫉妬は常に恋情を募らせる」に应ずる。

ただここで言う嫉妬はもちろんマルケの *zwîvel unde arcwân* (13777) のような破壊的性質のものであってはならない。

聖書と古典作家から引用して、トリスタンとイゾルトの愛の有り様を説明しているが、彼らの宮廷社会に対する態度は、すでに初期の段階においてははっきり現われている。愛のためには欺瞞も手段の一つなのだ。

「2人は秘密を注意深く隠し」て、関係を気取られない間は大へん心地よかった。「喜びと悲しみ」(*mit liebe und leide*) とを持って過したが、まだ「心からの苦しみ」(*herzeleit*) を知らなかった。

しかし清い愛を正当なものと主張し、妨害に対して自らの愛を貫こうとすれば、妨害は一そう強力になり、わなと奸計が次々に用意される。切り開く手段は、欺瞞しかない。こうしてトリスタンとイゾルトの本当の意味の愛の物語が始まる。「清い愛を立派に示した高貴な恋人たち」(126f) の物語が始まる。

§2 試練1—貴族ガンディーンのイゾルト誘拐

1) アイルランドの貴族ガンディーがマルケ王の宮廷を訪れる。彼は、身分高く、堂々たる体軀の宮廷騎士である。しかし槍も楯も携帯せず、代りにロツテを背負っている²⁰⁾。かつてイゾルトに奉仕していて (*ritter unde amîs*)²¹⁾、この度の来訪は「彼女のため」(13131) であった。

食後マルケ王は、ガンディーにロツテの弾奏を所望した。ロツテの名手は報酬を要求すると、王は不用意に、望む物はなんなりと差し上げようと約束する。演奏が終ると彼は報酬として王妃イゾルトを要求する。いわゆる *don contraignant*²²⁾ (*fr.* 強制贈与) である。ガンディーは王の約束不履行は、相互義務の一方的排除で、それは王の権利に違反すると言う。最後には自分の主張が合法か否かを一騎討ちで決しようと提案する。これに対してマルケ王宮廷の者は誰一人立ち

あがろうとはしなかった²³⁾。この度も戦ったのはトリスタンである。ただ剣や槍の戦いではなく、ハーブとロッテの戦いであり「詐欺師」が、「欺し、欺まされる」(13417) 戦いであった。

2) イゾルトがガンディーンに拉致されたと聞くと、イゾルトはハーブをつかみ馬をとばして、海辺で潮待ちしているガンディーンに追い付く。馬を立木につなぎ、剣を懸けると、ハーブだけを持って吟遊歌人になりすまし、彼に近付く。ガンディーンは彼にハーブの弾奏を所望し、報酬を約束する。

「この御婦人を慰め、泣き悲しむのをやめさせたらこの天幕の中の一番上等の衣服を与えよう」(13309ff) と。ガンディーンは更にカルタゴの女王ディードー²⁴⁾の曲 (*leich*) を望む。その間に潮は余りにも満ち過ぎた。もう高い背の馬からでないと、イゾルトを船のデッキに乗り移せない。

ゴトフリートはこうした場合に語呂遊びを楽しむことが多い。

トリスタン「あなたの御婦人を海水に触れないように船にお乗せしましょう」

ガンディーン「お前はこの方に触ってはならぬ」

イゾルト「あの方(トリスタン)が私に触れてはいけないなんて、そんな馬鹿な」

「触れる *rüeren*」にはもちろんエロチックな意味が含まれている。

トリスタンは馬を連れてきて、イゾルトを馬の背から船に乗せると見せかけ、約束の報酬、「天幕の中の最も美しい衣服」をもらって逃げ去る。「美しい衣服」とは本来吟遊歌人が歌の報酬として拝領するものだが、ここではもちろんイゾルトである。

宮廷に帰る「途中2人は花咲く野原で憩い、お楽しみになったかどうか、臆測することは控えましょう」と作者はほのめかすだけにとどめる。「Saga」では、「森の中で楽しい一夜を過ごして、翌朝宮廷に帰った」と述べ、「Sir Tristrem」では、2人の過ごした期間は「七夜」だったと言う。

ここでエロチックな描写を抑えた方が、後の、妻を奪われたマルケ王へのトリスタンの苦言が生きてこよう：「殿…ロッテの演奏のために女王様を他人の手に渡すなんて」。

夫たるもの、妻をもっと注意深く監視 (*huote*) すべきだとするのは、オウィディウスも言っている (*Amores* II, 19)。寝取った男が、寝取られた男に注意するという図々しさ、いや監視がきびしくなれば、楽しみも増すというもの。

3) 王妃の誘拐と救出というテーマは、「ランスロ」に見られるが、元来アイルランドやウェールズのケルトの民話に多い。男のもとに突然見知らぬ謎の人物が訪ねて来て、男の妻を自分の女であると主張し、策を奔して、あるいは力づくで女を拉致し、彼岸の国へ伴って行く。夫は略奪した男を追って彼岸の国に達し、妻を奪い返す、という筋である²⁵⁾。

あるいはトリスタンが吟遊歌人に変じてイゾルトを救ったのは、後で神明裁判にかけられた彼女を、彼が巡礼になりすまして難を救うことを予示しているようでもある。

突然現れた男に王妃を奪われても、夫のマルケ王も、宮廷の家臣も誰一人何もし得なかった。これで、イゾルトに一番ふさわしい男は、妻をさらわれたマルケ王でもなく、イゾルトを奪い損ねたかつての愛の騎士ガンディーンでもなく、イゾルトを奪い返したトリスタンであることが実

証された。それはイゾルトの騎士を自認するアイルランドの内膳頭が、竜退治の冒険で真の騎士たることを実証し得なかったことに対応する。トリスタンとイゾルトと、マルケとの関係がここでもはっきり決定づけられている。

§3 試練2－内膳頭マリョード

1) 美しく聡明なイゾルトに思いを寄せる者は、アイルランドの内膳頭や、貴族のガーンディーンだけではない。コーンウォールの国の内膳頭マリョードも、「自分に対して全く気のない女に」片思いをする男たちのひとりである。この三人はそれぞれ高位の騎士であるが、わけでもマリョードは貴族、*barin* (Baron) の身分でマルケ王筆頭の内膳頭 (*sin oberste truhsæse*) である。ここでも内膳頭は悪役で、ライヴァルを意識してずく立ち回り、トリスタンの敵役として負のイメージを与える役柄を演じる²⁶⁾。

ミネザングや愛の物語でおなじみの *huote* (見張り) が登場する。トリスタンとイゾルトは、王の腹心マリョードに絶えず監視され、追跡される。2人は用心深く対応し、機知で切り抜ける。見張りは一段ときびしく、巧妙になる。この攻防をゴトフリートは、わなをかける猟師と巧みに逃れる獲物に譬えて物語る。

2) マリョードは王妃に恋情を抱いていて、トリスタンに親近感を抱いている。住居を共にし、ベッドを並べていた。

ある夜トリスタンは、傍らのマリョードが寝入ったのを見届けると、こっそり抜け出して「*weide*に通じるけものの道、*strichweide*²⁷⁾13487」, 即ち「けものが草をはむ場所に行く道」を歩いて行った。

その夜は「不運がこの道にわなを仕掛けていた」。夜中に雪が降りつもり、月が皓々と輝いていた。侍女のブランゲーネがトリスタンを用心深く迎え入れたが、ドアを閉め忘れた。不運は重なるものである。

その間内膳頭は夢を見ていた。一頭の猪が森から出てきて²⁸⁾王の宮廷へ突進してきた。廷臣たちは集まって来たものの、誰一人立ち向かうとしない。マルケ王の宮廷の人々のだらしなさ、頼りなさはいつもながらである。猪は遂にマルケ王の寝室に飛び込むと、ベッドをかき乱し、よだれの泡で汚した²⁹⁾。猪はトリスタンの紋章である (4992)。この夢はマルケの結婚を汚したことを意味するのだろう。

3) トリスタンは、つけ狙われている獲物である。この時はイゾルトへの道にかけられた「わな、追跡して来る猟犬、しつような見張り」, 即ち猟師のマリョードに思いが至らなかった。

マリョードは夢からさめると、トリスタンのいないのに気付く。すぐ密会を疑ったが、相手が誰なのか分らない。戸外に出ればトリスタンの足跡がある。獲物を狙う猟師のようにその後を辿ると、婦人用の住いの入口につく。ドアはあいていた。侍女の部屋か、それともイゾルトの部屋か。ろうそくのともし火は暗い。手探りで壁を伝って行く。イゾルトの寝室の前に来た。そっと2人の所在を確かめる。イゾルトへの恋情故に憎悪はいやまし、友情が裏切られた思いが重なる。

トリスタンが楽しい思いを果して帰ってみると、マリョードの態度がよそよそしい。気まづい沈黙の時が流れる。秘密が嗅ぎ付かれたのに気付く。

マリョードは慎重に振舞う。王にはそっと耳打ちをするだけにとどめる、あなたの甥と王妃の間によからぬ噂が宮廷にたっていると。

王は大へん誠実で思いやりがあり邪気のない男、喜びの「導きの星」(13656)であるイゾルトの不倫を疑うことができず、さりとて苦しい胸の思いは晴れない。絶え間なく見張っていたが、確証はつかめなかった。トリスタンがすでに、内膳頭に疑われていることをイゾルトに知らせ、注意していたからである。

4) 王は真相を知ろうとして、日夜観察を怠らない。イゾルトに質問して探りを入れ、言質を取ろうとする。イゾルトはこのわなをうまく逃れる。王にはマリョードが、イゾルトには侍女が黒衣役として秘かに、それぞれの主人に知恵と策略を授ける。この度の舞台はベッドの中。夫婦の寝物語で王が最初にかけた質問のわなは——王は近く巡礼に出かける。留守中王妃は誰の庇護を望むかという質問である。四夜の試みは成功しそうに見えて、成功しない。

(a) 第1夜。最初は油断があった。イゾルトは軽率にもトリスタンの名をあげてしまった、「勇敢で、賢明で、思慮深いお方ですから」と言って。

王は早速内膳頭に報告する。秘かに恋心を抱く内膳頭は王に、王妃の名誉を考え、トリスタンの追放を進言する。王は甥の非行を証明しえず、甥に対する疑念・邪推に苦しむ。

イゾルトは無邪気にブランゲーネにありのままを報告すれば、聡明な侍女は思わず、「馬鹿な！」と叫んで、王妃をなじる。これは内膳頭の陰謀だと見抜き、すぐに忠告と助言を与える。

ここで「疑いと猜疑」(*zwivel unde arcwân*) についての作者の意見が開陳される。いわゆる余論 (Exkurs 13777–852) である。恋する時疑惑を抱くのは、愚かさの最たるもの。恋には疑惑がつきものだが、疑惑を追求して真相を知り得てもまた新たな疑惑がわく。心の安らぎは得られない。得るのは苦痛だけだ。マルケは悪循環に陥る。熊が蜜を取ろうとして、目の前に吊り下げられた棒を繰り返し払い除ける。最後に力尽きて自ら倒れるさま (283ff) に似ている。

(b) 第2夜では、ブランゲーネの忠告と策が功を奏し、王は遂にイゾルトの仕掛けたわなに捕えられる。

王は妻を抱き、口づけをして言う、「お前を置いて旅に出るのは、気が狂うほどつらい」。イゾルトは、その話は冗談ではなかったのか、と泣き悲しむ。欺かれ易い王は、妻の涙にすっかり疑いを捨てた。

イゾルトは追撃の手をゆるめない——私は他国から来た身寄りのない女。あなた一人が頼りなのに、私を残して旅に出られるのは、私を愛してない証拠と嘆く。マルケはほろりとして、旅の間の世話は、礼儀正しく、思慮深い甥に任せようと言う。イゾルトは思いがけない申し出に愕然とした振りをして、トリスタンについて罵詈雑言の限りをつくす。彼は「私の伯父(モーロルト)殺しの恨み」を怖れて、私にすり寄り、おべっかを言う男。私はどこであろうと王について行きたいと。マルケは妻の弁舌に丸め込まれた。疑惑と疑念 (*zwivel unde wahn* 14013) は霧散した。

王は内膳頭に成行きを伝え、妻にはなんの不実もないと言う。内膳頭は次の策を授けた。

(c) 第3夜。マルケ王は「またもや質問をしてわなを仕掛け、彼女を捕えた」³⁰⁾ (14029ff)。王は言う、この度の旅はやむを得ないもの。留守の間そなたに国の統治を任せる。先日、甥のトリスタンを快く思っていないと申された。なれば旅に出る前に彼を生国バルメニーエに帰らせよう。

王妃は王の言葉に慌てる。ひとまず感謝して反論する。トリスタンを宮廷から追放すれば、それは王妃の伯父殺しの復讐だと噂されるだろう。それに今の政治状況では、王の留守の間国を守れるのはトリスタン以外にはない。戦いが起って敗北したら、トリスタンを追放した王妃のせいだと責められるのは必定。私を王の旅に同行させてくださるか、彼に留守を守らせるか、と王の決定にゆだねる。

王妃の関心はトリスタンの名誉にしかないことが分って、王はまたも *zwivel unde wân* に立ち戻り、以前にもまして憎悪の念を抱く。

(d) 第4夜。第2夜と反対に王妃が王を抱き、柔い胸を押しつけ、口付けをするなど露骨な態度にて、問答という言葉のわなで王を捕まえようとした。イゾルトはまたもトリスタンを誹謗する。旅行で王の身に不慮のことが起こったら、トリスタンはイゾルトの名誉と国を奪い取ってしまうでしょう。トリスタンを生国へ帰すか、旅に同行するかしてほしい。その間はマリョードに私を守らせてください。さもなければ私を同行させるか。この国を誰に任せられても構わない、あなたさえよければ。トリスタンとマリョードを競わせる作戦は成功した。王は疑惑を忘れ、イゾルトの潔白を信じた。

内膳頭マリョードは「王妃について本当のことを言ったのに、王は彼を嘘つきだと思ってしまった」 (14226ff)。

マルケとイゾルトの2人のベッドでの会話の中で、暗示的ではあるがすでに、愛の世界と宮廷の世界とは相容れないことが明らかになった。ハルトマンの作品の主人公エーレックやイーヴェインのように、危機に直面した夫婦愛を修復しようという気は全くみられない。結婚と愛（いわゆる純粋な愛）とは、価値観の違う二つの別の世界である。追いかける獵師と追われる獲物との間には、和解はありえない。あるのは欺き、偽りである。イゾルトはマルケの王妃ではあるが、「愛する人」ではない。ひたすらトリスタンに気を配り、ひたすら彼を弁護する女である。

次にマルケは、占星術に通じたメロートの知恵を借りる。舞台は宮廷内の果樹園に移る。

—未完—

注

- 1) モンマスのジェフリーによると（ブリタニア列王史。8, 15ff）、アーサー王の父ユーサー・ペンドラゴン（竜）は竜が空を飛ぶ幻（王の地位の予言）を見て、旗に竜の印しを用いた。
- 2) *Ce fu péchiez*. 新倉俊一は、ここでは「罪」ではなく、「不運、災難」の意にとるべきだろうとする（ヨーロッパ中世人の世界。186, 210頁）。なおバール2158-61では「その時はやって来た—彼は立ち停まる—恋の飲物を飲んでからの、その期限が。たちまち、ひとりで後悔し始める—「ああ、神よ！何という苦しみ！」であったことか。（新倉訳）。

- 3) Bernger von Horheim MF 112,1 も同種の歌である。
- 4) 2人の愛を予告するこの *insigel* は、後で3回使用されている。(a)愛の洞窟の青銅の扉は愛の女神の門であり、その扉の二つのかんぬきは「愛の封印」(17016)である;「この二つ封印」(17027)の一つは西洋杉製で、「愛の知恵」を意味し、他の一つは象牙製で、「純粹」を意味し、この二つが「愛の家」を守っている;(b) 2人の最後の別れの言葉、「この口づけを…死ぬ時までかわらず、わたしはあなたのもの、あなたはわたしのものであることの(誓いの)「印し」(18355)に致しましょう。
- 5) Krohn:ibid. S.169.
- 6) トマ、ドゥース断片、1218行以下:「はくらふたりの純粋な真の愛 (*amur fine et vraie*) のもたらした大いなる苦しみと悲しみの数々を、さまざまな飲びと愛の証を、海の上で一緒に飲み、そのため恋に捕われることになった飲物を…」(新倉俊一訳)。
- 7) この度はイゾルトには先程の拒否的態度は全く見られない。この急変については何故か説明がない。
- 8) Wace:Roman de Brut, 1154. 6948-92行。媚薬ではなく、ただのワインを飲んで恋が燃えあがった例:「Henguist の娘 Ronwen がまず飲み、次に彼が飲む。2人は各々盃の半分のワインを飲み干す。そして2人は口づけをする。——すべては国の習わしに従って、王 Vortigern は美しい Ronwen に対して、悪魔のそそのかした狂った恋に燃える」。
- 9) 「愛のわな」(*laquei amoris*) の比喩は、オウィディウス:「*Ars amatoria* III.591.「惚れて来たのを引っかけてまだ間もない男の場合でも、わなに落ち込もうとしているうちは、自分だけがそなたの寝室をわがものにできるのだという期待を持たせることだ」(藤井昇訳)。「鳥もち」もオウィディウスの影響であろう。
- 10) *wildenære* は、網やわなをかけて鳥獣を捕える人。正確には「ミンネの女神に仕える Wildfänger」。
- 11) フランス語のこの言葉遊びは、おそらくトマから引いたのであろう。なお Anti-Tristan と言われるクレチアンの「Cligès」(546-557)にもある:「二人(アレクサンドルとソルダモール)は「海」の上において、彼らの病はすべて、「辛さ」と、二人を捕らえている「愛」に由来」していた(渡辺浩司訳)。プロヴァンスの作品にも見られる、よく知られた言葉遊びだったのだろう。
- 12) 恋を癒す医師の比喩は、オウィディウス: *Remedia amoris* 551に同類の比喩がある: (恋に焦れた) ハートをいやすレーテのアモール」(P. Ganz: Tristan. 2. s. 325)
- 13) 作中には3つの愛についての余論がある。(1) 12183-357 (175行) は、Minneklage を含む Minnebußpredigt. (2) 16923-17138 (216行) は、Minnelehrpredigt. (3) 17858-18114 (257行) は、Minnelobpredigt である。
- 14) ヒヨスは、中世では薬や魔法の薬として知られていた。酩酊状態にさせる麻酔のような作用が様々な利用された。ゴトフリートはここで「今の世の愛」を激しく非難しているが、これは彼の一貫した信念で、すでにプロローグでも嘆いている:「心からの愛を求めようとしなさい、また愛する人のために清い愛の苦みに耐えようとする人の少いのは、なんと悲しいことか」(193ff)。
- 15) 12503-506の4行は、abab の交差韻で、LとSのアクロスティヒョンを持つ詩節形をなしていて、例の如く格言風の内容である。
- 16) ブランシェフルールに対して、彼女の家庭教師も献身的態度を示している:「私の生命をかけて、あなたをお苦みからお救いすることができれば、喜んで致しますこととお疑いなきよう」(1251ff)。
- 17) トリスタンとイゾルトが媚薬を飲み終わった時、おくれて入って来たブランゲーネが驚ろき、つぶやいた独り言 (11705f) が、ここで繰り返されている。
- 18) すでに解決ずみの伯父モーロルトの件を持ち出して、トリスタンをなじったこと。
- 19) マタイ伝 5, 37:「あなた方は、然り、然り、否、否と言いなさい」。
- 20) *der hërre mit der harnschar* (名誉刑を背負ったこの貴族, 13173) のガンディーンは、片時もロッテを体から離さなかった。犯罪者は刑罰として、自分の職業に関係あるものとか、犯した犯罪を示す物を荷う

ことがあった（名誉刑）。ガンディーン過去の犯罪については不明だが、ここでは実際にロッテを用いて「犯罪」を犯している。

- 21) Saga では、「彼は彼女を長い間愛していた」とある。なおダヴィデの楽器ハーブに対して、ロッテは下等な楽器だとされていた。
- 22) 前もって贈与の約束をさせて、yes の言質をとり、後で欲しい物の名を言う。約束した者は、それが何であれ拒むことは許されない。例えばマルコ福音書 6, 21-28：ヘロデ王が、ヘロディアの娘の踊りの報酬に「欲しいものは何でもやろう」と言ったのに対して、少女は「洗礼者ヨハネの首」を要求した。
- 23) vgl. 5966ff. なお「イーヴェイン」の6366以下、「バルチヴァール」の153, 25以下も同じ状況であった。
- 24) カルタゴの女王ディードーとアエネアスの悲恋については、中世ではハインリヒ・フォン・フェルデケの「エネイーデ」とそのフランス版「エネアス物語」を通して知っていた。この場面でのディードーの曲は、ガンディーンとイゾルトとの別れを暗示する。
- 25) 死の神からアルケルチスを助け出したヘラクレスの話とか、妻のエウリュディケーを冥界から救い出したオルフェウスの神話は、このジャンルに入る。
- 26) R. Krohn: ibid. S. 199.
- 27) この語には種々の解釈がある。BMZ: Ausgang auf den Fang; Lexer: Jagdgang; Kurtz-Mohr: Jagdgelände. R. Krohn は、この猟師用語は、この場合「Jäger の道」ではなく、「Weideに通ずるけもの道」として Wildwechsel の訳語をあてる。A. T. Hatto も pasture, L. Okken も Äseplatz (äsen 草をはむ場所) とする。
- 28) 「森の猪」(Eber aus dem Wald)：詩篇80, 14「*aper de silva*」を、アウグスティヌスはその「釈義, *Expositio*」で解説している。豚及び猪は不潔を、森は異教徒を表わすと。「傲慢な異教徒」の意。
- 29) Tristramsaga によると、この箇所は次のようになっている：「猪はマルケ王の両肩の間に突き当たったので、彼の口から血の泡が流れ出て寝具を汚した…。ゴトフリートの場合、猪が襲ったのは、マルケのベッドであり、恐らくトリスタンがマルケの結婚を汚した」ことになる (L. Okken. 490頁)。
- 30) トリスタンとイゾルトが媚薬を飲んで恋に陥った時も、同じ比喻を用いている：「恋の猟師たち (トリスタンとイゾルト) は、互いに相手に網を張り、わなを仕掛け、尋ねたり答えたりして待伏せした (11930ff)。



媚 薬

Wiener Pergament-H. Aus: Loomis-Krohn



トリスタントとイザルデの森の中の生活

(Eilhart von Oberg. Universitätsbibliothek Heidelberg. Aus: Buschinger u. Spiewok)



初夜のマルケとブランゲーネ、右はトリスタンとイゾルト

Aus: Loomis-Krohn